研究課題　近世朝廷行事の通時変化と空間構成に関する史料情報の研究資源化

研究経費　二三万三五二〇円

研究組織

　研究代表者　　　村 和明（東京大学大学院人文社会系研究科・准教授）

　所内共同研究者　山口和夫

　所外共同研究者

研究の概要

（１）課題の概要

　近世（江戸時代）の朝廷行事が描かれた近世ないし近代初頭成立の各種絵画史料と文献史料・絵図とを併用し、描かれた行事の名称・場・人物（役職名）・内容年代等を読解する。近世朝廷固有の機構・職制が関わる行事の史料情報を特定・抽出する。得られた知見を整理して一覧表・目録稿類を作成・公開し、近世朝廷行事の空間構成（場）と通時変化の視覚的・総体的把握の一助とする。

（２）研究の成果

　宮内庁京都事務所での京都御所(安政度内裏遺構)調査、泉湧寺宝物館での史料調査とも、東京大学史料編纂所の事業と共同利用・共同研究拠点の活動に対する理解、公募型共同研究制度があって、実現することができた。2名という極小の研究組織も、共同作業の日程調整上、利点が大きく、課題関連知識・文献・史料情報を共有し合え、異なる視点・発想からの対話や議論が弾み、有益であった。  
なお主な成果を要約して下に記す。   
① 近世中期に社家から分れて成立した地下家出身で、父を襲い、天明度内裏で非蔵人、安政度内裏  
で六位蔵人を務め、昇殿も勅許され、明治維新後の新政府にも一時出仕。華族編入請願を退けられ、京都府士族として他界した藤島助順の履歴・人物情報を一定程度把握することができた。  
② 「旧儀式図帖」について、「孝明天皇紀」附図、「公事録」附図とも対比し、光格上皇葬儀時から  
の仙洞御所・泉涌寺境内・路中をも含む空間を対象に、人物の縮尺や絵画表現には凝らないながら、年中行事・儀式の構成と詞書(解説文)とは、「公事録」のそれに相当程度近似しつつも、近世以前に成立・維持された朝儀・公事に加え、近世朝廷固有の構成員の関わる儀式・行事をも克明に記録した点で稀少な明治年間成立の史料であり、史料批判を踏まえれば近世朝廷研究に資し、活用するに足る、という見通しを得た。  
文献史学からの朝廷研究は、主に1980年代以降21世紀の現在まで実務機構に関する実証的成果が蓄積されつつあるものの、近世史料の記載分析に比べ、アーカイブズ学的研究、記録の生成、機能、蓄積、管理、伝来過程の解明は、緒についたばかりで、残された課題が多い。  
大工頭中井家旧蔵建築指図・移築現存遺構からの建築史学の研究も、寛政度・安政度内裏で復古調が意図され、現存する儀式空間・天皇らの居住空間、移築された居住空間・祭祀空間を主対象に進み、職制にもとづく実務空間を対象とする研究蓄積は厚くはない。こうした現状に対し、調査成果から視座を相対化し、課題・論点を提起することができた。  
③ 幕府・幕藩関係では、中井大和家・甲良豊前家・木子家旧蔵指図や幕政史料・大名家伝来文献  
史料が活用され、江戸城(村井益男・松尾美惠子・深井雅海氏等)、藩邸(吉田伸之・岩淵令治氏等)、武家の表奥の空間概念（福田千鶴氏）、公務の場としての老中役宅(荒木裕行氏)につき研究が進捗しているが、空間論の視点を加味した近世朝廷研究開拓の端緒を示し得た。感染症拡大のため広範な史料調査を尽くすことはできなかったが、今後も時間をかけ、調査・解析を続け、実証的寄与を果すべく努めたい。